別紙様式

平成２８年度道徳教育実践研究事業実績報告書

１　研究指定校の概要

指定校名	上勝町立上勝中学校
校長氏名	井上　一男
所　在　地	徳島県勝浦郡上勝町大字生実字東戸越７３番地
電話番号	0885-46-0015
U　R　L	http://e-school.e-tokushima.or.jp/kamikatsu/jh/kamikatsu/html/

２　研究課題

（１）研究主題

心の活力を高め，豊かな生き方を育む道徳教育

～主体的に考え，行動する力を養い，たくましく生き抜く生徒の育成～

（２）設定理由

本校は，全校生徒３２名のへき地小規模校である。生徒は，純朴で何事にもまじめに取り組む。また素直で，学年・性別に関係なく仲が良い。しかし，ほとんどの生徒が小さい頃からの人間関係に変化がなく，自然と序列化されており，全体的に競争意識が低い。また，少子化のため，地域の人や保護者が大切にしてくれ，生徒は与えられることに慣れてしまい，「誰かがやってくれるだろう」という考えから，主体的に行動する力が乏しい生徒も多い。卒業後は，親元を離れて生活をする生徒もおり，どのような環境や状況下にあっても，自分の考えを表現し，自分らしさを発揮しながら前向きに生き抜く力が必要である。

本校では，教育活動に体験的活動を数多く取り入れている。しかし，それらの活動の中で触れている道徳的価値に，どれだけ気付き学ぶことができているかとなると十分とはいえない。そこで，道徳の時間を充実し心の活力を高め，人と関わる中で自己有用感を実感させながら，自分自身を高めていこうする生徒を育成したいと考え，本主題を設定した。

３　研究の概要及び特色

（概　要）

『ねらい』

道徳の時間を道徳教育の要として位置づけ，道徳的心情を豊かにし，道徳的実践意欲の向上を図るとともに，人間としての生き方についての自覚を深める。

『実践のポイント』

○全教員が道徳の授業を実施し，教師の指導力向上を図りながら生徒の道徳性を育む。

○読み物資料を通して，生徒が資料の登場人物に託して自らの考えや気持ちを素直に語る中で，道徳的価値の理解を図る。

（特　色）

〇道徳の時間の指導

本校では主に「読み物教材を通して，生徒が教材の登場人物に託して自らの考えや気持ちを素直に語る中で，道徳的価値の理解を図る」という指導方法を中心におき，多様な指導方法について研究を進めてきた。

道徳の授業では，２２項目すべての内容を網羅できるように１つの資料を１時間の授業で収めるように取り組んでいる。年度初めに作成した年間計画に基づき，資料分析や授業展開について時間を設定し，各学年で検討を行っている。また，１学期，２学期には全ての学年で研究授業を継続して行った。研究授業の際には，指導講師を招き，県・郡の道徳部会の先生方にも案内を出し，研究会の場で助言いただいた。

２学期後半からは，ローテーション道徳を開始した。学級数が少ないため，全学級においてできるだけ多くの教員が授業を行えるように計画している。その中で，全学年や１，２学年合同の授業も実施した。生徒もローテーション道徳に対して前向きに捉えており，２月のアンケートでは「新鮮な感じがする。」「『どんな授業なのだろう？』と少し楽しみになりました。」などの意見が得られた。また，全ての教員が道徳の授業に参加し，互いの授業を参観することで，教員の授業力向上につなげることができている。

授業の終末には振り返りとして，自分の考えを書く時間を確保している。中心発問について，懸命に考え，仲間の意見を聴いた後に，感じたことを整理する時間である。授業の中で考えが変わった生徒もいれば，やはり納得がいかず，そのままの思いを書く生徒もいる。生徒個々の道徳性の高まりを検証するとともに，我々自身の授業の評価とすることをねらいとしている。毎時間の授業での自分の気持ちについて数値で記録することで，生徒の取り組みや興味の把握ができる。このように「振り返りシート」を使って継続して記録を残していくことで生徒の変容が見え，授業の課題も把握できるようになった。

〇自作資料

上勝町はいろどり事業やゼロウェイスト宣言などで全国的に知られ，社会科地理的分野の教科書でも町おこしの成功例として紹介されている。しかしながら，外部からはとても熱く活気づいているように見えるこの町だが，上勝中学校に赴任したとき，外から見えるきらびやかな面ばかりでないことを気付かされた。生徒たちと日々生活する中で生徒たちは，生活の不便さに対する不満や，どうせ田舎だから，というような消極的な感情をもっていることに気付く。マスコミ等で取り上げられていることに対しても，自分たちのこととして，関連してとらえている生徒は少ないように思われた。

確かに，ふるさとのよさというのは一度そこから出てみないとわからないものかもしれない。しかし，上勝町には本当に熱い思いで町の存続のため奔走している人たちがいる。この町の魅力に心から惹かれ，移住してくる人たちがいる。そんな人たちの思いが生徒に伝わらないまま，高校進学とともに多くの生徒が町から出て行ってしまうことに寂しさを感じていた。

そこで道徳において，地域に実在する人物を取り上げた資料を作成し，地域住民やこの町を築いてきた先人たちの思いに触れさせることはできないかと考えた。注目したのは生徒と年齢も近く，本校の卒業生でもあり，親子二代で町の活性化に取り組む東輝実さんの存在である。「上勝の木や棚田はずっと昔の先輩が後世のことを思ってつくり，守ってくれる人がいたから今ここにある。」「自分自身も町を守る一員となり，100 年後も上勝を残したい。」という熱い言葉に私は心を打たれた。そして，資料作成の趣旨を説明すると快く取材と協力を引き受けてくださった。

道徳の読み物資料を作成するうえで苦慮したことの一つは，文章表現と内容構成の工夫

であった。道徳教材である以上，登場人物の感情や気持ちの変化をはっきりと文字に表してしまってはならない。しかし，きちんと読み取ることができるような言葉や構成も工夫しなければならない。また，重要な言葉や内容であっても授業中に生徒の発言から引き出したいものについては，文章から取り除かなくてはならない。この部分がしっかりできていないと道徳の授業が単なるストーリーの読み取りになってしまう。本当に伝えたい部分を抑え，かつ確実に読み取り，考えることができる文章やストーリーを作成することは容易ではなかった。

次に苦慮したのは文量である。1 時間完結を基本とする道徳の授業では，範読にかけられる時間は長くても 10 分程度と限られている。また，文章が長く複雑になると 1 回の範読でストーリーを理解すること自体が難しくなる。したがって，どの価値についてどのように考えさせたいのかということに主眼を置き，内容を精選し，文章は簡潔で重複を避け，かつ分かりやすいものにする必要があった。

そして最も苦慮したのは，実在する人物の生き様を描く以上，事実に反してはならず，過大な脚色はできないという点である。読み物資料では起承転結が必要である。そして，苦しむ場面と新たに道徳的価値に目覚め，生き方を変える場面のメリハリが大切である。東さん本人と何度も事実や彼女の思いを確認しながら，ストーリーを加筆していく必要があった。

資料の作成には大変な時間と労力が必要であり，東さんのご協力はもちろん，指導してくださった鳴門教育大学大学の金野誠志先生，県教育委員会の笹田葉子先生の支えがあってこそ完成することができた。資料作成を通して作成者である私自身も道徳的価値について深く考えることができ，また，他の資料に対してもこれまでとは違った視点でみることができるようになったように思う。そして何より，身近な人物や地域についての学習は，生徒の関心が高く，生徒に与えるインパクトも大きい。主人公である東さんにゲストティーチャーとして実際に来校していただき，直接生徒と対話の機会を設けることができることも強みである。

今回，自作資料を完成することができたのは，「上勝」という地域のもつ豊かさや背景によるものが大きい。しかし，また機会があれば自作資料作成に挑戦してみたいし，資料作成にはそれだけの意義があると考えている。

〇その他

・学級掲示（道徳の学びの可視化）

毎週の道徳の授業について，資料名，内容項目，資料の概要や中心となる場面絵，生徒の感想等を画用紙一枚にまとめて教室の背面に掲示をしている。学習の積み重ねを視覚に訴え，ときに立ち止まって振り返ったり，生徒たちが心の成長を実感したり，日常生活や体験活動等へのつながりを意識したりするきっかけになることを期待している。

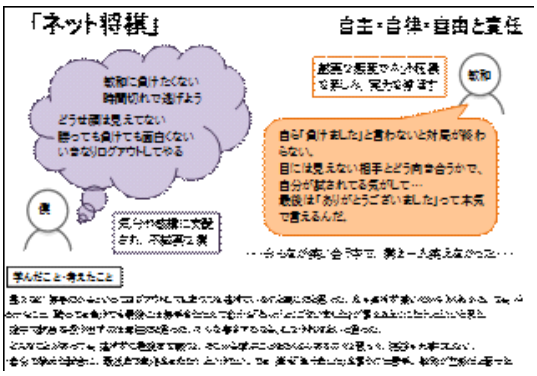
・道徳通信

本校では，全学年で道徳通信を発行している。道徳の時間に使用した教材について，簡潔にまとめたものを作成し，生徒の振り返りシートの内容を掲載している。作成した道徳通信については，学級に掲示し，保護者へも配布している。道徳通信を通じて，保護者に道徳教育について理解していただき，家庭内で教材について保護者と生徒が話をすることで，多様な考えを知り，生徒の道徳的価値の理解を深められると考えている。

・「私たちの道徳」（文科省版）の活用

教材について保護者に知ってもらい，家庭内でも道徳について一緒に考えてほしいとい

う家庭啓発のために，家族と「私たちの道徳」を読むという活動を夏休みの課題とした。



4　研究の成果

・継続して授業を行っていく中で，生徒たちが授業の中で自分の言葉で表現しようとする姿が見られるようになってきた。また，他の生徒の意見も聴きながら，多様な意見を取り入れようとするなど，聴く態度にも変化が見られた。

・文化祭，合唱コンクール，運動会等の行事の中で，生徒が一層主体的に取り組めるようになった。また，縦割りの活動の中で，先輩が後輩を励ましたり，困っている仲間を助けたりと，それぞれの立場に気付き，行動できるようになってきている。

・研究授業等，授業を参観する機会を増やすことで，教師間で道徳の指導について情報共有が図れたり，講師先生や他校の先生方に参観していただき，指導・助言をいただいたりしたことで，教師の指導力の向上を図ることができた。

・校内研修だけでなく，県外研修などに自主的に参加する雰囲気が定着し，授業力の向上に取り組むことができた。「特別の教科　道徳」が施行されるまでの間に，今後も校内研修を定例化し，自信をもって授業に臨むことができるようにしていきたい。

〇アンケート結果

Y：肯定，※：どちらでもない，N：否定

	1学期			3学期		
	Y	※	N	Y	※	N
1 道徳の授業が好きである。	17	9	6	13	10	7
2 道徳の授業で自分の意見を発表できている。	17	4	11	13	4	13
3 あいさつを正しくできている。	20	6	6	19	10	1
4 正しいことばづかいができている。	18	8	6	18	9	3
5 礼儀正しく生活できている。	18	9	5	16	10	4
6 規則正しい生活習慣が身についている。	10	14	8	13	8	9
7 日々の生活の中で健康について意識している。	12	7	13	16	6	8
8 自分は大切な存在だと思う。	12	11	9	6	14	10
9 自分が好きである。	6	10	16	7	9	14
10 自分はみんなの役に立っていると思う。	6	13	13	3	15	12
11 公共のマナーを守ろうと思っている。	21	9	2	23	5	2
12 地域のために何かしたいと思っている。	15	14	3	16	12	2
13 自分の町（ふるさと）に誇りをもっている。	20	10	2	20	9	1
14 地域の自然や環境を守りたいと思っている。	22	9	1	24	6	0
15 自分の進路や将来について考えることがある。	23	8	1	16	7	7
16 将来の夢や目標がある。	16	10	6	13	6	11

◯ローテーション道徳についてのアンケート
・先生が変わることで自分の考える事も変わっていろんな考えを持つことができていいと思う。
・先生によって文の読み方が変わったりすることがあるのでおもしろいと思います。
・一人一人教え方がちがっていて問いかけも違うのでいい体験になっています。話しにくい先生もいるのでローテーション道徳はいいと思います。
・ローテーションはいろんな先生の授業を受けられるからいいと思います。
・いろいろな見方や考え方が生まれるのでいいと思います。
・ローテーション道徳はいつも新鮮な感じがします。いろいろな先生方の授業を受けられるのは楽しいし，これからも続けばいいと思います。でも，最後の道徳は担任の先生がいいです。
・いろいろな先生の道徳が受けられて新鮮な感じがする。
・普段あまり授業を受けない人から受けられるので新鮮味があっていいと思います。
・毎回違った授業の感じなのでいいと思います。「どんな授業なのだろう？」と少し楽しみになりました。

５　今後の課題
・生徒間で一定の関係を築くことができている場合は，互いを尊重し合う行動がとれているが，集団の中では周りを意識し，まだ互いを尊重しようとする態度が十分に育っているとはいえない面がある。
・これまで道徳教材については学年等で検討を行ってきたが，特に担任教師の負担は大きいように思われる。本校では今後，複数の教師が道徳の授業を行っていくローテーション道徳を取り入れていきたいと考えている。それによって，担任教師の負担軽減につながるだけでなく，１つの教材を，時間をかけて研究することで得意分野の伸長や苦手分野の克服につながると考えている。また，互いの授業を参観することで指導力の向上につながるメリットもある。
・生徒の学習状況を正しく把握できるように，教師自身が道徳的諸価値について基本から学び，理解を深める必要がある。
・道徳の教科化にあたって，評価の方法を確立しなければならない。本校の取組のひとつである「振り返りシート」は評価を行う際に，重要な資料になるだろうと期待している。しかし，これをどのように分析し評価につなげていくかは，今後検討が必要である。生徒に書かせる数値評価は，我々が授業を振り返る上で有効であったが，項目の見直しが必要である。評価により生徒の道徳性を伸ばし，評価活動を通して指導や授業の改善につなげていくということが今後の課題である。
・ローテーション道徳を年度当初から年間計画に位置づけ，確実に実施できるように工夫する。

受け継ぐ思い

「あんたも一緒にきぃ。」

小学三年生だった私は、突然、デンマークに行くことになった。母は町役場の職員で環境問題に携わっている。ゴミのリサイクルが進んでいる国への視察へ赴く母に同行するのだ。今まで、ゆっくり母と一緒に旅行などしたことのなかった私は、あれもこれもと準備をしながら出発の日を待った。

デンマークに着くと、さっそく視察だ。そこでは、例えば、缶や瓶入りの商品を購入する場合、商品の代金とは別に、数十円の容器代を払わなくてはならない。しかし、それは、スーパーなどに設置されている専用の機械に容器を戻すと返金される。リサイクルがむだなくごく自然に行われ、容器回収率は九割にも達していた。

「私らの町でもこういう分別をせなあかん。」

その光景を目に焼き付けるように、母は低い声でつぶやいていた。

「うん、せなあかんな。」

と、私も母にあわせるように繰り返した。

振り返ってみると、私にとっての初の海外旅行は、見たことのない風景や初めて味わう料理、そして新たな人との出会いで大いに好奇心が刺激されるものだった。

母は、この視察をきっかけに、環境問題に関する講演会やシンポジウムに私をよく連れていくようになった。難しくて分からないこともあったが、他に子どもが見当たらない中に自分がいるということで、背伸びして大人の会話に加わる心地よさを味わった。

「次はどこに連れて行ってくれるんだろう。」

よくそんなことを思ったものだ。

母は、以前にも増して、ゴミ問題の解決を目指す取組に没頭するようになった。講演会やシンポジウムから帰る度に、それまでより増して大量の本や資料を読みあさった。自分でも率先してゴミの分別も進め生ゴミにだって平気で手を突っ込んだ。そんな母の姿を見て、何もそこまでしなくてもと思ったのは、おそらく私だけではなかっただろう。

かつては、上勝でも、地区ごとに集められてきたゴミはどんなものでも燃えるものは燃やして処分していた。豊かな自然の中で黒々とした煙があがるのを見て、『こんなところで子どもを育てたくない』という思いが母にはあったらしい。確かに、環境問題を解決するということは大切なことに違いはない。しかし、そもそも、上勝は都会の喧噪とはかけはなれた自然豊かな町だ。ゴミ問題だって、行き詰まってどうしようもないというようなことでもなかったはずだ。この上勝で、何が母をそこまで突き動かしていたのか、このころの私にはまだわからなかった。

その後、考えに考えた母が携わり、ゼロ・ウェイストアカデミーというＮＰＯ法人が立ち上がった。そして、『２０２０年にゴミをゼロにする』、『この町を持続可能な町のモデルにする』と宣言した。

そんな母の帰宅は毎日夜中の二時や三時ということもあった。いつまでたっても母が帰ってこないので、私は我を忘れて母の仕事場へ電話をしたことが何度かあった。母が立派なことをしているということは、わからないではない。でも、このままじゃ……。話したいことがたくさんあった。プルルル、プルルル…。発信音がしばらく続いた後、誰かが受話器を取ったのだが、その度に、私は、とっさに受話器を置いてしまっていた。母の『せなあかん！』という声が頭をよぎり、言葉が出てこなかったのだ。

そんな私も、中学生になった頃には、母と真正面から話ができるようになっていた。そしてはっきりと分かったことは、母の願いが将来にわたって『この上勝を残す』ということ。生まれ育った自分たちの町上勝を素晴らしい自然ごと未来に引き継ぐ、これを実現させるということだった。山あいにある私たちの町は過疎が進み、消滅の危機にひんしている。その打開のためには、何か画期的な取組が必要だった。

日本一、いや世界一を目指した今まで存在しなかった取組。しかも、自分たちにもできる取組を一からこの上勝で始めることによって人々の注目が集まる。すると、たくさんの人々が上勝に集うようになり、町が活性化する。町民も誇りを取り戻せるだろうというわけだ。環境問題に力を注いでいたのもＮＰＯの立ち上げも、もちろん上勝の自然を残すためでもあるが、その結果として町を活性化させたいという信念からだ。それに、母は挑戦していたのだ。

母には、もう一つの構想があった。このまま取組を進めると、十年後にはこの町には世界中から人が集まる場所になるはずだ。そこで、拠点となる場所が必要となるというのだ。

「カフェなんてどうかなあ。」

高校生になった私に、母はそう話しかけてきた。しばらく沈黙が続いたが、結局、私は何も言えなかった。よくよく話を聞いてみると、町内外から人が集まり、この町の食材を味わい、ゴミゼロの取組を知り・語り・体感できるような、五感で感じられる上勝のショールームのようなカフェを実現させたいというのだ。その話を聞きながら、私は何度も深く大きく頷いたことを覚えている。

はじめは、夢物語のように話していたが、流石に有言実行の母だ。私が大学を卒業するころには、カフェのオープンに向けた計画が動き出していた。そして、カフェの責任者として、私はその経営も任されることになった。分からないことがたくさんある中で、私なりに精一杯やっていたつもりだったが、

「あんたにはカフェをやろうっていう主体性が感じられんな。やるんはあんたでよ。」

と、母にはよく叱られたものだ。『えっ、一生懸命やっとるし…。』というのが、その時の素直な思いだった。それでも、母の背中を見ながら働く経験を積み重ねていくうちに、その忙しさや厳しさが増すにつれてわかってきたことがある。大切なことは、何事も、できるかどうかを頭の中で考え悩むことではなく、今、実際に何をするか何をしないかという決断と実行ということなんだ。そう考えられるようになると、叱る母の言葉の意味が分かり、少し、母に近づけたかなという気がしてきたものだ。

いよいよカフェを建てる工事が始まり、夢の一つが形になろうとしていたある日のことだった。突然、

「背中が痛い！」

といいながら、顔をゆがめて母は倒れた。町の診療所ではどうすることもできず、ドクターヘリで大病院へ緊急搬送された。『痛い、痛い。』と声を出し続けていたのに、ヘリに乗って

からは急に黙り込み、どこか遠くの一点をじっと見つめているようだった。八時間の手術の後、母は意識を二度と取り戻すことはなかった。母と交わした最後の言葉、それは、『カフェのあれ、できとんか？』だった。

当然、それからはカフェに関する全てのことが、私に降りかかってきた。どうすれば、交流の拠点となるカフェを実現できるのか。誰よりも一番母の熱い思いを聞いていたはずの私なのに……。実際には、私はいつまでも母の後を追うばかりで、自分自身が一体何をすればいいのか、その答えをいつも母から見いだしていたことに、今更ながら気付かされた。車の中で涙をぬぐい仕事に向かうこともあったが、前に進むしかなかった。

そんなとき、支えてくださったのが、『正木のお母さん』や『旭のおじいちゃん』をはじめとした家族のような地域の方たちだ。私には、あちこちにお父さんやお母さん，おじいちゃんやおばあちゃんがいる。この人たちのためにも、そして、これから上勝で暮らしたいと考えている人たちのためにも素晴らしい上勝を未来に残したい。そう思いながら、ある日の午後、疲れた私はふと気付くとお気に入りの坂の上にたどり着き、山や森、棚田、見慣れた町の景色を眺めていた。すると、そこで生き生きと暮らすなじみの人々の姿や生活が次から次へと脳裏に浮かんでは消え、浮かんでは消えていった。それは、母が残そうとしたもの、愛したもの。

気がつけば、もう日がだいぶ傾き、優しい夕日が町をいっそう美しく輝かせていた。

「私も、活気のある上勝を残したい。そして、その一員として生きていきたい。」

使命感なんて、大げさなことからではない。ただ、ただそう思うだけだ。何か大きな心強い存在の後押しを感じながら、涙をぬぐうことはもうなくなった。

それから私は、理想とするカフェの実現のため、考えられることすべてに取り組んだ。交渉・判断・決断しなければならないことに追われ、文字通り寝る間もない日々だった。

「何もそこまで頑張らなくても…体壊すよ。」

たくさんの人に心配をかけたが、そんな声も私の耳には届かないほど無我夢中だった。

母が亡くなったその年に、なんとかオープンしたカフェの名は、「polestar（ポールスター：北極星）」。私が名付けた。夜空に輝く北極星のよう道しるべとなり町の行く末を見守る場所。ここを目指しみんなが集まってくる、そんな場所になって欲しいという願いからだ。

あれから三年、カフェの経営は軌道に乗りつつある。このカフェの存在やカフェに託された願いも、徐々にではあるが多くの人に知られるようになってきた。ここを目指して初めて上勝を訪れた人たちに、上勝のよさを伝えることができるようになってきたのだ。同世代の仲間がこの場所に集まり、一緒に上勝の将来を考え、真剣な議論も進んでいる。そんな仲間たちと、上勝が自立・存続するため SNS を利用した広報活動やイベントの企画・運営、特産品の販売活動などあらゆる事業を行う「RDND（アール・デ・ナイデ）」という会社も設立した。しかし、町の「縮小」を肌で感じ、自分が知っている故郷とは別の町に上勝がなっていくような感覚が事実としてある。カフェがオープンした年には一九〇〇人あまりだった人口は一七〇〇人を切ってしまった。

今、私はカフェの経営から少し離れ、ゼロ・ウェイストアカデミーの事務局長をしている。生まれ育った自分たちの町上勝を素晴らしい自然ごと未来に引き継ぐ。そう考えた母の取組から、初心に返って学び直したいからだ。母のこの発想は斬新で、確かに上勝の名を全国区に押し上げた。こんな今までとは違う発想の転換が必要だとあらためて思う。カフェだけでは変わらないが、確かな手応えは感じている。町の根っこの部分にある何となく感じている上勝のよさを、もっと多くの人たちにわかりやすく、見て感じてもらえるようにしたい。そんなことを考えていると、何かしないではいられない。これには、道しるべもなければ答えもない。でも、生まれてきてくれた息子たちのためにも、この町を未来に引き継ぎたい。だから、

「せな、あかん。」